

日本農業気象学会2025年全国大会 オーガナイズドセッション (OS) 一覧

開催日	OS番号とタイトル	オーガナイザー (※: 代表者)	OS概要	研究発表 受付*の有無
3月13日 (木)	【OS-1】 Controlled Environment Agricultureの課題 と展望 —国際的な視点から—	※松田 怜 (園芸工学研究部会長, 東京大学) 地子 智浩 (電力中央研究所)	温室や植物工場を用いた植物生産は、海外ではしばしば環境制御型農業 (Controlled Environment Agriculture, CEA) と総称される。日本のみならず各国で発展を続けるCEAには、その国・地域特有の事情を反映した課題もあれば、国境を超えて共通に解決すべき課題もあろう。本OSでは、施設園芸研究の世界的拠点の1つであり、近年では植物工場に関する取組みも急速に進んでいるオランダのWageningen大学で、関連研究の中心的役割を長らく担ってこられたEp Heuvelink博士を演者 (オンライン) に迎え、CEAにおける収量、エネルギー利用効率、および光利用効率の向上、さらには自動化・デジタル化や持続可能性などをキーワードにご講演いただく。CEAの現状と将来の見通しについて、国際的な観点から議論を深めるとともに、日本のCEA研究の今後についても考える機会としたい。	無
	【OS-2】 農耕地のGHG排出削減に関わる国内外の動向	※小野野介 (農研機構・農環研) onok[at]affrc.go.jp ([at]→@) 常田岳志 (農研機構・農環研) 南川和則 (国際農研)	カーボンニュートラルに向けて農業分野でも温室効果ガス (GHG) 排出削減が求められている。本オーガナイズドセッションでは、農耕地のGHG排出削減に関わる国内外の動向および削減技術開発の現状について情報を共有するとともに、今後の研究の方向性を議論する。	あり
3月14日 (金)	【OS-3】 温暖化による九州果樹生産への影響および影響要因 解明のための気象観測ネットワークの構築	※臼井靖浩 (農研機構) yasuusui[at]naro.affrc.go.jp ([at]→@) 杉浦俊彦 (農研機構)	近年、果樹産業では温暖化の影響により多くの問題が発生しており、とりわけ九州7県の二ホンナシ生産においては、花芽の発芽不良で生産量が減少するなど栽培上の問題が顕著となっている。九州各県では施肥時期、側枝の育成方法、発芽促進剤の利用等を見直すことで発芽不良の軽減対策に取り組んできたが、依然として発生が続いている。そこで、新たな対策技術の構築に向け、発芽不良の発生実態の把握のため九州各県で統一した基準を用いた取り組みを始めることにした (児玉ら,2022)。しかし、花芽の調査に関しては、統一した基準で調査することができたものの、気象データの収集方法については、各県で用いた測器やその設置方法・条件が統一されておらず、また、樹園地での電源の確保の問題もあり、通風機能のない簡易な装置でのデータ取得が一般的となっていた。このため、測定値の精度が不十分であると推察されるとともに、地域間のデータ共有や面的な解析が困難な状況であった (臼井,2024)。そこで、臼井 (2024) はこれらの問題を解決するために、岡田・中村 (2010) による強制通風筒を用いた気温・湿度観測の実施と九州・関東・北陸における公設試験場を対象に観測ネットワークを構築した。現在、観測ネットワークは上記地域9県において10箇所を観測を継続しており、並行して発芽不良に関する調査も行っている。本OSでは、各県の実態調査の状況とともに、観測ネットワークへの期待と今後の対策技術の開発、各県の連携について議論する。また、果樹に限らず農耕地における観測ネットワーク構築の今後の展開についても議論する。	あり
	【OS-4】 JapanFluxデータベースを用いたフラックス統合解析 の方向性	植山雅仁 (大阪公立大) ※岩田拓記 (信州大) hiwata[at]shinshu-u.ac.jp ([at]→@) 平田竜一 (国立環境研)	JapanFluxではフラックスデータベースを整備し公開する準備を進めている。このデータベースはマルチサイトのフラックス比較、陸域生態系モデルの改良、衛星データと組み合わせたスケールアップなどの多くの研究で利用が見込まれる重要なものである。本オーガナイズドセッションではそのような統合解析につながる現在の取り組み内容を共有し、今後のデータベース活用について議論する。	あり
3月15日 (土)	【OS-5】 気候変動に頑健な農業生産に向けた農業気象学 の貢献	※飯泉仁之直 (農研機構) iizumit[at]affrc.go.jp ([at]→@) 滝本貴弘 (農研機構) 増富祐司 (国立環境研)	本OSでは、農業・食料システムを気候変動に対して頑健にするための研究発表を募集する。募集対象には、作物モデルなど影響モデルの高度化、適応策としての作物監視・予測、気候変動影響のアプローチ、影響評価の基盤となる作物データセットの改良、についての発表などが含まれる。本OSでは、研究の対象地域や時空間スケール、手法について特に制限を設けない。	あり
	【OS-6】 Internet of Plants (IoP) の共創・実装・普及 ～Z世代が展開すべきSociety5.0型農業・農学を 目指して～	※北野雅治 (高知大学IoP共創センター) 岡村俊宏 (高知県庁)	農家の超高齢化 (平均年齢68.5歳)、農家数の激減、さらには気候変動の過激化・頻発化の時代を迎え、農業の革新が喫緊の課題となっている。日本農業気象学会2018年大会 (創立75周年記念大会) の国際シンポジウムにおいて、Internet of Plants (IoP) の概念が公表された。その直後に、内閣府の「地方大学・地域産業創生交付金事業」において、IoPを高知県施設園芸に実装し普及させることにより、Society5.0型農業の一例を具現化するプロジェクトが始まって約6年が経過した (2024年10月現在、施設園芸農家約1500戸に普及)。本OSでは、研究成果 (作物生理生態情報のオンサイト可視化、営農支援情報の創出等) および実装・普及に向けた取り組みを紹介すると共に、変革すべき現状を支援、維持しながら進めなければならない農業イノベーションの困難さ、さらにはZ世代が展開すべき農業・農学の姿について議論を深めたい。本OSは、技術開発・普及研究部会との共催である。	無

\* OS内での研究発表の申込みについて

OS内で発表を希望する場合、**発表申込サイトの「発表形式」欄で「オーガナイズドセッション」を選択し、「連絡事項」に発表を希望するOSの代表者名を記載して**発表申込締切日 (1月20日) までにお申込み下さい。その際、**代表者にメールで発表希望の旨を連絡**して下さい。申込締切後、**代表者から発表の可否について連絡**が届きます。OSでの発表が採択されなかった場合は一般研究発表のプログラム内でご発表頂きますが、**採択されなかった場合には発表を希望しない場合は、発表申込サイトの「連絡事項」にその旨、記載**して下さい。